NY エッセイ 104

中瀬有紀

シアター・レビュー

ストリート・アート！マイアミにて

親しい友人がニューヨークへ来るというので、私からのプレゼントの意味を込めて、まもなくオープンするブロードウェイ劇場での演劇のチケットを2枚購入したのは、公演日の約3カ月前でした。演出家も作曲家もこれまでにいくつもの傑作を生み出した巨匠で、出演者の中には大変有名な映画俳優も起用されていて、友人を招待するのに間違いない作品のはずでした。公演当日、仕事を切り上げて急いで友人との待ち合わせ場所に向かい、時間がギリギリだったのでそこからタクシーに乗って劇場へ行きましたが、劇場に到着するやいなや何かがおかしいことに気がつきます。劇場前の人だかりの先にあったのは、セキュリティ・チェックでもチケットのもぎりでもなく、閉ざされた会場の扉に貼られている一枚の張り紙です。そこには、「この公演はクローズしました」とありました。驚きと同時に、友人が道中のタクシーの中で「この公演のことを酷く書いているレビュー（批評）を読んだ」と話していたことを思い出します。そこまで酷い公演だったのか今はもう知る由もないですが、私、消費者の一人としては、チケット購入者に公演を予定より早く終了することを連絡しなかったプロダクションが優良だったとは言い難く、ここまでのタクシー代も返してくれ！と言いたいところです。

その後、インターネットで調べてみたところ、その公演は私が観劇するはずだった日の約一週間前に終了していました。今年の各アワードにもノミネートが希少で、チケットが売れず、想定の約30パーセントの売り上げしか得られなかったために、早々と公演を終了したという記事をいくつも見つけました。劇場に足を運ぶ前になぜ確認しなかったのか、悔やみます。ただ、劇場入口の張り紙に書かれていた通り、チケット代はクレジットカードに返金されていて、損をしたといえば劇場までのタクシー代20ドルだけなので私はまだいい方かもしれません。劇場前の人だかりの中には日本から来ていた客もいて、なんとも心苦しかったです。

それにしても今回の公演終了の件は、批評の良し悪しが公演の存続に大きな影響を及ぼす現実を目の当たりにしたように感じました。私はニューヨーク・タイムズ紙の批評を参考にすることが多いですが、だいたいタイトルと書き出しで批評家が公演を良く思ったかそうでないかがわかります。たとえば、先述の早くに終了した公演の批評のタイトルには「混乱した世界」とあり、書き出しは「ちょっと静かにしてくれませんか？素晴らしい俳優が舞台に立っているのにセリフが聞こえない、というのが公演の印象です」とありました。また今年春に初演を迎えた新しいオペラについては、「作曲家の乏しい貢げもの」というタイトルに始まり、音楽をこてんぱんに貶しています。さらに、友人が携わっている夏にオープンしたミュージカルについて書かれた批評は、「酷い公演を見たとき、だいたい私はなぜこんなに醜い結果に陥ったのか理由を考えます」という書き出しで、あーこりゃダメだという私の予想どおり、その批評は演出から音楽、振り付けとデザインまで最悪だと書いています。友人が関わっているのでいつか観に行こうと思っていた私に、「この批評読んでもこの公演を観に行こうと思うの？」と他の友人は聞き、私も「うーん」と首を傾げてしまったのは確かです。「事前に購入した公演の悪い批評を読むと、手持ちのチケットを一番好きでない知り合いに手放す」というその友人のジョークも全く嘘ではないかもしれません。

「批評に振り回されるな」と私の大学院の先生は言っていましたが、そうは言ってもやはり関わっている作品が良い批評だったり、批評家が自分の名前を書いてくれていたりすると嬉しく思ってしまいます。そして酷い批評の時は残念に思うと同時に、書かれている内容に納得する部分があることも確かです。はっきり意見を述べる批評は読み応えがあり、批評そのものもエンターテイメントかもしれません。出来の悪い作品を批評する時、少しでいいので良い部分も見つけて書いてくれるとありがたいと作り手としては願います。